



コタンメール Kotanmail No.65

北海道白老郡白老町若草町 2-3-4

財団法人 アイヌ民族博物館

2012年12月20日発行

<http://www.ainu-museum.or.jp>

「アイヌの神様ものがたり」大盛況

12月1日(土)、白老町中央公民館で「アイヌの神様ものがたり」が開催されました。このイベントは、NHK 室蘭放送局開局 70 周年を記念して開催されました。今までアイヌ文化に触れたことのない方でも楽しむことができるように、影絵や絵本の読み聞かせ、歌や踊りを企画しました。

影絵は、アイヌの神話を題材にし、アイヌ語、アイヌ音楽、アイヌのデザインなどを使いながらアイヌの伝統文化を影絵作品によって現代によみがえらせています。今回のイベントが北海道で初の公演でした。当日少しだけ舞台裏から見学しました。

個人的には影絵ってあんまり動きがないんじゃないかな、と考えていましたが、先入観が見事にふぎとびました。登場キャラの感情によって影絵は急に大きくなったり、遠くに見えたり。音楽と楽器とカラフルな文様が合わさって、迫力のある、ひとつの芸術作品になっていました。

絵本の読み聞かせは、白老おはなし会トトロの平松幸子さんが「セミ神様のお告げ」を読んでもくださいました。この絵本は、千葉県在住の宇梶静江さんがアイヌの豊かな文化を若い世代に伝えたいと、アイヌ刺繍を丹念にほどこし、製作したものです。絵本のBGMとして、当博物館職員がムックリ(口琴)とトンコリ(五弦琴)を演奏しました。



そして最後は、博物館担当の「アイヌの歌と踊り」。物語とウポポ(座り歌)を披露した後、お客様と一緒に踊りを踊りました。今回のようなファミリー向けイベントで、どのようにアイヌ文化を紹介し、触れあってもらうか考え、さまざまな点に工夫をこらしました。今回はタイトルに「ものがたり」が入っていることもあり、普段行っていない物語の披露に力を入れ練習しました。フィナーレでは、出演者・来場者の皆さんと一緒に踊り、楽しい時間を過ごすことができました。今回のイベントは 430 人の方にご来場いただきました。イヤイライケレ。アイヌ文化に興味を持ってもらうきっかけを作れたなら成功です！ (中野巴絵)

「火おこしの伝承」てんまつ記

アイヌ口承文芸で、天地創造の時のことを伝える話に次のようなものがあります。

この世で初めに生えたのはドロノキで、アイヌはこの木で火をおこそうとしましたが、煙ばかり出て火はつきませんでした。次にハルニレが生え、この木で火をおこすとすぐに火がつきました。アイヌはこの火を最高の神とし、ドロノキから生れた煙は病の神となって人に災いを与えるようになりました…

いろいろな意味で示唆に富んだ伝承ですが、果たして実際にドロノキとハルニレに火をつけると、そんなにはっきりとした違いが認められるのでしょうか。私は現在、伝承者育成事業の自然講座を担当をしているのですが、受講生たちにこの実験をやってみようという提案したところ、みんな賛成してくれました。

2ヶ月前に採取したドロノキとハルニレは程良く乾き、いよいよ実践の日です。せっかくなので火おこしからチャレンジしましたが、いきなりはうまくいきません。そこでその過程は端折り、燃え方の確認に着手しました。火付きの頃は双方ともかなりの勢いで燃えるものの、ドロノキのほうは徐々に火力が落ち、何度も焚き付けを足し、その度に煙が充満して目が痛くなります。それに対してハルニレは手をかけなくても良い感じで燃え続け、1時間後にはきれいな灰に。すっかりヒールにされてしまったドロノキには気

の毒ですが、伝承にあるくぐりには事実に即しているのだという結果が得られました。

さてこの実験終了後、再度火おこしに挑戦しました。でも火種はできるものの、発火はしません。当館職員岡田恵介氏の助言も受け、最後は疲れて火種に息を吹きかけているときに誰かが冗談をいうと吹き出してしまふ、徹夜明けのようなテンションになってしまいました。でも笑いで火口(ほくち)が乱舞する中、コツを掴んで見事その場にいた全員が火おこしに成功。そして12月の寒気の中、自分たちでおこした火に親しみと尊さを感じ、「確かに一番偉い神様だね」と納得し合いました。

(ウトナイ湖サンクチュアリ 安田千夏)



↑ドロノキ

↑ハルニレ

アイヌ影絵「ポロ・オйна ～超人アイヌラックル伝～」評

去る12月1日、白老町中央公民館で「アイヌの神様ものがたり」というイベントが開催されました（前ページ記事参照）。当日は会場の係員さんが右往左往するほどの満員で、私は出入口近くで立ち見。ここ数年、この種のイベントから足が遠のいていたのですが、「アイヌ影絵」というのが気になって、気温マイナスの中自転車をこいで見てきました。

その甲斐がありました。今回のアイヌ影絵の上演は、アイヌ文化をめぐる地域イベントの一つというだけでなく、後々まで記憶にとどめるべき出来事だった気がします。

当日ご覧になった方もなっていない方も、インターネットの「スカパー！オンデマンド」で税込210円でご覧になれますので視聴をおすすめします。（「スカパー アイヌ影絵」で検索）。当日分からなかった公演の裏側やアフタートーク（おもしろい！）も見られます。今回の白老公演はその「完全版」とのこと。（以下、番組ページから引用）

国際的に活躍する影絵の演出家ラリー・リードと、バリ島の伝統芸能と舞踊を基に活動する「ウロツテノヤ子バヤンガンズ」（小谷野哲郎ほか）、アイヌのミュージシャン OKI、アイヌの伝統歌唱ウポポのグループ・マレウレウによる新作影絵公演が、2011年12月15日アサヒ・アートスクエア（東京）にて行われました。

スクリーンに映し出される影絵の物語と、その裏側で行われるパフォーマンスの熱狂をお届けします。

実力派アーティストの登場

アイヌの古典文学や伝統芸能を今の時代にどう見せるかという点において、この公演はかつてない成功例だと思います。

成功の最大の理由は、何より OKI やマレウレウといったアイヌの実力あるアーティストの存在でしょう。影絵のプロ集団の存在がなければ実現しなかったのはもちろんですが、かつてはこうした「異種コラボ」的な企画の場合、アイヌはあくまで素材提供者かせいぜい端役でしかなく、出来上がった作品からアイヌの存在感が感じられることはまれでした。

これはアイヌに限った話ではなく、洋の東西を問わず芸術は、異民族や異国のエスニック（民族的）な要素を取り込んで生きながらえてきました。しかし、今はもう文化的資源を持ち去られる側ではなく、新しいものを生み出す主役として「民族」が登場し、表舞台で活躍しています。今回の影絵も主役は明らかにアイヌでした。そして今現在、そのトップランナーは OKI とマレウレウでしょう。アイヌの側に実力あるアーティストがいて初めて「アイヌの舞台芸術」と呼べる作品となったのです。

「影絵」というアプローチ

成功のもう一つの要因は、影絵という形式です。影絵はアイヌの伝統的なものではありませんが、影絵を文学、演劇、音楽、美術を総合した舞台芸術だととらえれば、ストーリー運びを演劇（日本語の語り等）に委ねることで観客の理解を容易にし、その分文学や音楽は水で薄めたり余計な味付けをせず濃厚な民族的・古典的語法のまま提示、そして美術（ビジュアル）は影絵に抽象化されアイヌの物語世界のイメージを損ねない、という具合に実にうまく機能していました。

例えば冒頭からアイヌ語の原典（ポロオйна＝人文神を主人公として節をつけて語られる物語、神典）

の謡いをそのまま使ったり、劇中のウポポやトンコリなども大部分は今風のアレンジを加えず使っていましたが、一般になじみの薄いこうしたアイヌの古典芸能も、総合芸術の中に置くことで、効果を高めることはあっても取っ付きにくさを感じさせませんでした。現代音楽が映画音楽やバレエ音楽としてまず受け入れられた例が多いのと似ています。客席の多くを占めた子供たちも最後まで良い子にしていました。



© アイヌ影絵プロジェクト

もちろん影絵以外にもいろいろなアプローチがありえるでしょうが、私が知る限りでは最も成功した組み合わせの一つだったように思います。

マレウレウ——古くて新しいアイヌ音楽の織り姫たち

先ほど触れたマレウレウ（アイヌ語で「蝶」の意味）ですが、実は今回最も衝撃が大きかったのがこのマレウレウでした。

私はこれまで名前しか知らず、実際に聞いたのは初めて。プロフィールによれば「アイヌの伝統歌『ウポポ』の再生と伝承をテーマに活動する女性ヴォーカルグループ」とのこと。

その驚きとは、ひとつは「伝統的」という意味での驚き。「え、この若さでこんな歌い方ができるの？ しかも4人も」。

同時に「新しい」という意味での驚き。「これはカッコイイ」。

古いものを古いままで保存・再現するのも大変困難なのですが、オリジナルの良さを損なわずに現代の感性で再生させているのがすごいところです。これは誰でもできることではありません。メンバーのうち3人は旭川や阿寒の出身とのこと。伝統的なアイヌ音楽に親しみ、新しい音楽もかなりマニアックに好き、という両方がある初めてできることです。

インターネット動画サイト youtubeなどでマレウレウの演奏を聞くことができますが、たとえば「rera suy（レラスイ）」という曲は7拍子（3+4）という珍しい変拍子で、アイヌの伝統的な歌唱法（うまい！）とともに実に個性的な魅力を生み出しています。また、座り歌（ロクウポポ）はウコウク（輪唱）という伝統的な歌唱法によって4人（本来は主に3人）が一拍ずつずれて歌いますが、まるで一目ずつずらすことで幾何学的な文様を生み出すアイヌの「編み」工芸と共通した美意識を感じます。手法は伝統的でありながら、ずれによって千変万化する響きのゆらぎはミニマルミュージックと呼ばれる現代音楽そのもの。ほかにも西洋音楽になり手法がこれらのアイヌ伝統音楽の中にちりばめられています。マレウレウの音楽は、アイヌの側からすれば「伝統の継承者」であり、非アイヌの側からすれば「伝統の破壊者」という裏腹な関係がおもしろいところです。ウコウクもただ輪唱しているのではなく、響きの面白さを歌手手が敏感に感じながら、それに反応しながら歌っているのがよくわかります。即興性からくるスリリングな面白さ。鋭い感性の持ち主だからこそできることです。

ただ、今のところ、今風にアレンジされた作品は伝統的なものほど成功していないように感じますが、そう思うのは私だけかも知れません。

おわりに

「アイヌの歌や踊りは『見る』ものではありません。一緒に楽しむものです」という言い方があります。一面では真理ですが、見るだけでは楽しくないもの、という意味を言外に含んでいるように思います。しかし見せ方次第では十分見て楽しめる作品に生まれ変わることを証明した公演でした。「紅白出演が夢」と公言するマレウレウですが、いろんな意味でアイヌ芸術・芸能の将来に希望を持たせる公演だったと思います。うれしくなって年甲斐もなく自転車を立ち漕ぎしながら帰ってきたのでした。（安田益穂）



© アイヌ影絵プロジェクト